

## 朧月夜の出家

藤村 安芸子

### はじめに

『源氏物語』若菜下巻では、光源氏と朧月夜が最後の手紙を交わす様子が描き出されている。出家した朧月夜に対して光源氏は、回向のときには第一に自分を思ってくれることを期待し、それに対して朧月夜は、一切衆生の一人として光源氏を回向することを告げている。回向とは、自らの善行の結果である功德を、他にめぐらし向けることである。自己と他者がともに成仏することを目指す大乘仏教においては、利他行としての回向が重視されていた。出家者となった暁には、自己の悟りを目指して仏道修行につとめ、善行をなし功德を積み重ねるとともに、その功德を一切衆生にめぐらすことが求められる。朧月夜の返答は、そうした思想をふまえた上でなされたものと言えよう。

しかし、この場面で朧月夜が語っているのは、具体的には、一切衆生の一人として光源氏を思うということである。ここでは、光源氏を第一に思うことは否定されているが、光源氏を思うことそのものは肯定されている。物語は、二人の恋の結末を、回向し、回向される関係として描き出したと言えるだろう。

けれども、そもそも仏教は、男女の恋を煩惱として否定していたのではないだろうか。『源氏物語』においても、仏教が他者に対する思いを執着として否定することが、くり返し描き出されている。光源氏は、他者を強く思うからこそ苦を味わうのだと痛感し、仏の教えに深い共感を示すが、それでもなお、他者を思うことを手放すことができない。そうした光源氏の葛藤が、『源氏物語』第二部において詳細に語られている。光源氏の生を物語るとき、仏教は、人間のもつ愛執の深さを浮かび上がらせるという役割を果たしている<sup>1)</sup>。

それに対して朧月夜は、他者に対する思いは仏教的作善の中に位置づけられると述べたことになる。朧月夜は、光源氏とは異なる形で自らの情念を捉え返した。それは、なぜ可能だったのだろうか。また、朧月夜の生を物語るとき、仏教はどのような役割を果たしているのだろうか<sup>2)</sup>。本稿では、光源氏と朧月夜の最後のやりとりを手がかりとして、以上のような問題について考えていきたい。

## I

朧月夜が最初に尼になろうと考えたのは、朱雀院が出家したときであった。しかし、朱雀院が、自分の後を追うように出家することをとめたため、朧月夜は二条宮に戻る。そこで再び光源氏と契りを結ぶが、女三の宮の密通をきっかけとして光源氏の心が朧月夜から離れる。まさにそのときに、光源氏に告げることなく朧月夜は出離をとげる。早くから出家を志していた朧月夜であったが、本意をとげずにいたのは、光源氏が引き留めていたからであった。朧月夜は、光源氏の願いを拒絶し、出家することはなかった。しかし、光源氏の懇願がなくなれば、すぐに尼になろうとしていた。物語は、光源氏の心が離れた直後に、朧月夜の出家を語っている。それは、朧月夜が、光源氏の心変わりを早い段階で予想しており、その予想が現実のものとなった時点ですみやかに髪を下ろしたのだということを暗示していよう。

朧月夜の出家をきいた光源氏は、朧月夜に見舞いの文を贈る。

あまの世をよそに聞かめや須磨の浦に藻塩たれしも誰ならなくに

さまざまなる世の定めなさを心に思ひつめて、今まで後れきこえぬる口惜しさを、思し棄てつとも、避りがたき御回向の中にはまづこそはとあはれになむ (④262頁)<sup>3)</sup>

光源氏は、歌の中に、須磨で味わった嘆きを詠み込んだ。須磨の思い出は、再会の場面で詠まれた歌にも登場している。二人の逢瀬ののちに光源氏は「沈みしも忘れぬものをこりずまに身もなげつべき宿のふち波」(④84頁)とよみかけた。須磨で味わった苦しみを訴えかけることによって、かつて二人の間にあった恋情が鮮やかに呼び起こされる。同時に、再び身を滅ぼしかねないというのに、なおあなたに惹かれているという形で、現在の思いの深さが示されている。かつて経験した苦しみを強調することによって、相手に対する恋情の深さが浮かび上がるのである。

朧月夜への最後の手紙でも、須磨流離という過去を持ち出したのは、互いの思いの深さを訴えかけるためであろう。同時に、最後の手紙では、須磨での経験が道心のきっかけとして新たに位置づけられている。その消息を次に丁寧に通っていくことにしよう。

「須磨の浦に藻塩たれしも誰ならなくに」については、現在二つの解釈が提示されている。一つは「須磨の浦で涙に濡れたのは、他の誰でもない私なのですから(私であるのに)」というものであり、もう一つは「須磨の浦で涙に濡れたのも、他の誰でもないあなたのせいなのですから」というものである。現代の注釈では、新日

本古典文学大系と新潮日本古典集成が前者の解釈を、新編日本古典文学全集が後者の解釈を採用している。古注にさかのぼってみると、『細流抄』は「此尼になり給へるをもよそにはきくましきと也我身すまのうつろひもそなた故なれはと也」<sup>4)</sup>、『孟津抄』は「朧の尼に成給ふをも源のよ所にきかむことかはすまへのことも誰故そとよみ給也すまへのこともそなた故なれはひとつに出家せんするものをとの心也」<sup>5)</sup>と注釈しており、後者の解釈をとっている。これらを受けて『湖月抄』は「朧月夜ゆゑに、須磨にさすらへしも誰ならず、我にてあれば、道心にもおくれ申すまじき物をとの心也」と、後者の解釈に前者の解釈を加えたものを新たに提示している<sup>6)</sup>。

以上の解釈をふまえた上で論者がとる立場は、この歌は、前者の意味を基盤としてもち、その上に後者の意味が重なることによって、朧月夜に対する切実な訴えとして意味をなすというものである。

まず、この歌を「あなたが尼になったことはよそごととは思えません。須磨の浦で涙に濡れたのは、他の誰でもない私なのですから」と解釈するとどうなるだろうか。よそごととは思えないという言葉には、自分もまた、あなたと同じように出家を志してきたのだ、という意味が含まれている。したがって、歌の後半は出家を志した理由の説明となる。歌に添えられている「さまざまなる世の定めなさを心に思ひつめて」という言葉と合わせて考えれば、須磨の浦でわび住まいの涙に濡れたのは、他ならぬ私であり、私は、須磨のわび住まいを通じて無常を知り出家を願うようになったのだ、と主張していることになる。

以上の解釈をふまえ、さらにこの歌を「あなたが尼になったことはよそごととは思えません。須磨の浦で涙に濡れたのも、他の誰でもないあなたのせいなのですから」と解釈してみよう。すると、道心のきつてとなった須磨流離はあなたのせいで引き起こされた、という意味が浮かび上がる。その訴えによって、あなたが尼になったことは、よそごととは思えないという言葉が、より重い意味をもつ。最初の解釈に従えば、よそごととは思えない理由は、自分も道心を抱いていたからである。そこに「あなたのせい」という意味が加わることによって、私が道心を抱ききつかけとなった出来事は、他ならぬあなたと共有している出来事なのだという主張が加わる。その中には、あなたが仏の道を志すことになったのも、私が須磨に行ったためではありませんか、という問いかけが含まれている。

私はあなたゆえに須磨に行き「世の定めなさ」を知った。あなたもまた、私との関係ゆえに、恋しい人との別れを味わい世間からの非難を浴び「世の定めなさ」を

知った。私とあなたは、同じように苦しみを経験し、同じように道心をもったのだ。そう訴えることによってこそ、あなたが尼になったことはよそごととは思えないという言葉が、切実な響きを帯びるのである。

歌に続いて、光源氏は「今まで後れきこえぬる口惜しさを」と述べているが、以上の論理にしたがえば、この思いももつともなものとして受けとめられるだろう。光源氏と朧月夜は、同じ苦の経験をもとに同じように出家を志した二人である。だからこそ、二人は同じときに出離をとげるはずであり、あなただけ先に髪を下ろし私が取り残されたことは残念だ、という嘆きが生み出されるのである。

ただし、物語の他の部分には、光源氏が朧月夜とともに出家することを願っていたという記述はない。光源氏が朧月夜の出家に衝撃を受けた理由は、時を同じくして出家できなかったからではなく、朧月夜が自分を捨てたと考えたからであろう。光源氏にとって出家とは、他者に対する思いを煩悩として否定した暁になすべきことであった。光源氏に知らせることなく尼となった朧月夜は、まさに自分に対する思いを否定し得た人物として映ったことだろう。それゆえ「思し棄てつとも、避りがたき御回向の中には」という懇願が生み出されるのである。

光源氏は、回向のときには第一に自分を思ってくれると期待している。その前提にあるのが「あまの世をよそに聞かめや須磨の浦に藻塩たれしも誰ならなくに」という歌である。あなたのために須磨へと流離したとは、あなたのために私は苦しみを味わったということである。だからこそ、朧月夜が一切衆生の救済を願うときには、まず、朧月夜ゆえに苦しんだ自分の救済を願ってくれることが、期待できるのである。

このとき光源氏は、朧月夜の勤行として具体的に何を思い浮かべていたのだろうか<sup>7)</sup>。もし、極楽往生を祈願する行だったのであれば、朧月夜が回向のときに第一に光源氏を思うとは、朧月夜は、自分の次にはまず誰よりも先に、光源氏に極楽往生して欲しいと願っていることになる。いいかえれば、光源氏は、あなたは私と往生したいと思っていますよね、とほのめかしている。光源氏は、朧月夜は出家した後もお自分を特別な存在として考え続けてくれており、だからこそ自分は「あはれ」と心を動かされるのだと訴えかけている。光源氏が願ったのは、お互いを特別な存在と考え、思い続けるという間柄であった。その願いを実現するものとして見いだされたのが、回向という営みだったのである。

光源氏からの文に対して、朧月夜は次のような返事を送っている。

常なき世とは身ひとつにのみ知りはべりにしを、後れぬとのたまはせたるになむ、げに、

あま舟にいかがは思ひおくれけむ明石の浦にいさりせし君  
回向には、あまねきかどにても、いかがは (④262—263頁)

朧月夜の返事は、最初の文・歌・最後の文という三つの部分から構成されており、それぞれの部分は、光源氏の言葉に応じたものとなっている。最初の部分では、光源氏が、私とあなたはともに「世の定めなさ」を実感していたと訴えたことに対して、「常なき世」を感じていたのは私一人であると反論している。続いて歌では、光源氏が後れをとったと嘆いたことに対して、後れをとった理由を朧月夜が問いかけるという形で、光源氏の言葉を切り返している。最後の部分では、第一に自分を思うだろうという光源氏の期待に対して、一番にということではなく一切衆生の人として回向します、と告げている。

朧月夜は、光源氏の希望を拒否する姿勢を見せている。したがって、先行研究でも、朧月夜の返事は「源氏の申出を拒絶」<sup>8)</sup>「きびしいぐらいの皮肉」<sup>9)</sup>と評されている。一方、姥澤隆司は、手紙の最後の文を「結局のところ、光源氏に対する回向は一切衆生のための回向の中で行う、という意味になるわけで、光源氏の望みを拒絶するものではない」と解釈し、「朧月夜の返書は、男からの消息に対して定式の切り返しを伴いながらその意図に反しない範囲で返答したもの、と言えるのである」と述べている。そうした返書になった理由として、姥澤は、朧月夜が光源氏への返事を書いたときの心情をあげている<sup>10)</sup>。たしかに朧月夜は、光源氏からの文を読み、改めてこれまでの二人の関係に思いをはせ、深く心を動かされ「心とどめて」返事を書いている。この場面の朧月夜の心情にもとづいて考えれば、朧月夜の返事を、単なる拒絶と見なすことは、当を得ていないことになるだろう。しかし、朧月夜の切り返しを定式にのっとったに過ぎないと考えると、手紙に登場する反発的な発想がもつ意味が見失われてしまうのではないだろうか。

男女の贈答歌において、女が反発的な発想を含んだ歌を詠むことは、男女の関係を深めていく上で、重要な役割を担っている。光源氏と朧月夜の贈答歌について論じた鈴木日出男は、光源氏が恋情を訴え朧月夜が切り返すという「贈答歌としての機知の呼吸」が二人の心の共感をつくりあげていったのだと指摘している<sup>11)</sup>。

朧月夜の最後の手紙は、それまでの光源氏への歌と同じように、絶妙な形で反発を見せることによって、二人の間に新たな地平を切り開くものなのではないだろう

か。反発にも共感にも、朧月夜の思いが込められており、両者がそろふことによって独自の世界が形成されていったと考えられよう。しかし、一方で、出家前の歌のやりとりと異なる点もある。以前であれば、贈答歌は、二人だけの世界を形づくる方向に進んでいったが、この手紙では、最後の部分に一切衆生が登場していることにあらわれているように、関係を世界全体に広げることが行われている。それが、尼となった朧月夜が見いだした、新たな光源氏との関係であった。では、そのような関係はどのように導き出されたのだろうか。

先にあげた三つの部分を合わせて考えてみると、朧月夜は、最初は光源氏との共感を拒絶しているが、最後には、回向というかたちでの光源氏とのかかわりを提示している。いいかえれば、最初は「常なき世」と実感しているのは私一人であると、孤絶した思いを述べているが、最後には、苦を抱えたすべての存在に対する共感をあらわしている。このような飛躍を可能にしているのが、間に挟まれている歌である。それぞれの部分は、複数の意味をもつことによって、独自性と他の部分との連続性を有している。連続性について考えるために、まず、それぞれがもつ意味について確認することにしてしよう。

最初の部分だが、ここでは、「常なき世」を実感しているのは私一人であると述べ、光源氏が須磨での苦の経験を根拠として提示した共感の関係を、拒否している。したがって、朧月夜のうちには、私が「常なき世」を実感したのは、光源氏の須磨流離とは異なる事柄であるという思いか、光源氏の須磨流離によって「常なき世」を実感したのは私だけであるという思いが存在していることになる。朧月夜の言葉は、どちらにも解釈しうる。

次の歌は、「あなたはなぜ私の出家に後れをとったのでしょうか。明石の浦であま船に乗って漁をしたあなたが」という意味である。その含意するところは、二通りに解釈できる。一つは、あなたは明石の浦で過ごしたから後れたのだ、というものであり、もう一つは、明石の浦で過ごしたあなたであれば、後れをとるはずがない、というものである。

最後の部分は「回向は一切衆生のためにするものですので、その中にあなたが入らないということはありません」という意味である。

では、これらはどのような関係にあるのだろうか。先に結論を述べれば、最初の部分の独立した意味として、「私が「常なき世」を実感したのは、あなたの須磨流離とは異なる事柄であり、それゆえ「常なき世」を実感しているのは私一人である」という主張が存在している。続いて、最初の部分と歌が連続することによって、「あ

あなたの須磨流離によって「常なき世」を実感したのは私だけである。なぜなら、あなたは明石の浦で過ごしており、私の出家に後れたのも、そのせいである」という意味をもつ。続いて、歌と最後の部分が連続することによって、「あなたはなぜ私の出家に後れをとったのでしょうか。明石の浦で過ごしたあなたであれば、私に後れをとるはずがないのに。出家できなかつたあなたを含めて、一切衆生のために回向します」という意味になる。

次に、その具体的な内容を見ていくことにしよう。先にあげた順番とは異なるが、まず、最初の部分と歌との連携について確認したい。

両者の結びつきについては、賀茂真淵が次のような解釈を示している。

哥のつゞけ、あかしのうらにいさりせし君にて、あま舟におくれしと待るはいかにそやといひて、下にはかの浦の御住ひは明石上故にこそあれわかことにより給ふとは覺えず、然ればよのさためなさも我身ひとつにそ覺えつるを、今更におくれぬるなどのたまはするよととかめて、且そのおくれ給ふもけに明石などの君達にかゝつらひ給へは也と、ことわりを聞得るやうにてうらむる也<sup>12)</sup>

真淵は、「明石の浦」は明石の君を指すと解釈している<sup>13)</sup>。この点については真淵に同意するが、朧月夜の反論の内容については異論がある。朧月夜は光源氏の言い分を、須磨の浦の住まいは明石の上ゆえであり私のせいではないと切り返した、と真淵は解釈している。しかし、朧月夜は、事件を起こした後に漣標巻で自らの行いを振り返ったときにも、若菜上巻で光源氏と久しぶりに対面したときでも、一貫して光源氏は自分のせいで須磨に行ったと考えている。朧月夜の胸に深く刻まれているのは、そうした強い自責の念であり、だからこそ、久しぶりの対面の後に光源氏との関係を復活させてしまうのである。光源氏への最後の手紙で、相手の言い分を切り返すために、責任転嫁をするとは考えにくいのではないだろうか。

朧月夜が光源氏との関係を省みたとき、くり返し思い出していたのは、光源氏の心の浅さである。朧月夜は、漣標巻において、光源氏がそれほど深く自分を思っていないことを意識した。その後、若菜上巻で光源氏から対面を求められたときも「昔よりつらき御心をこころ思ひつめつる年ごろ」（④78頁）と光源氏との関係を振り返っている。朧月夜は、光源氏との関係を通して、光源氏の不実さを痛感してきた。そうだとすれば、この歌は、光源氏の心変わりを詠んだものと解釈されよう。光源氏が用いた「須磨の浦」を「明石の浦」に言い換えることによって、須磨から明石

へ光源氏に移り住んだことが暗示される。「須磨」という語によって思い描かれるのは、都に帰るあてもなく、愛しい人々と別れ寂しくさすらう姿だが、「明石」という語によって思い描かれるのは、明石の君と出会い、やがて都へと戻り、明石の君との間に生まれた娘が宮中に入り皇子を産むという、栄華を極めていく姿である。朧月夜は、自分のせいで須磨に流離したことはその通りですが、あなたは最終的には須磨から明石に移り、栄華への一步を踏み出したのではないですか、という形で、光源氏の言い分を切り返したと考えられよう。「明石の浦」は、明石の君だけではなく、明石の君によってもたらされた栄華をも意味している。

このように考えれば、光源氏の須磨流離は、朧月夜が「常なき世」を一人実感した理由であると同時に、光源氏が出家できなかつた理由であると解釈することができる。光源氏は、須磨流離をきっかけとして愛しい女君と出会い、幸いを得た。一方朧月夜は、光源氏の心が他の女君へと移るといふ苦しみを味わった。だからこそ、光源氏は「常なき世」を実感することができず、朧月夜の出家に後れをとったのだ。

以上が、最初の部分と歌とを連携させることによって導かれる解釈である。しかし、その結果として、最初の部分のもう一つの解釈、つまり「私が「常なき世」を実感したのは、光源氏の須磨流離とは異なる事柄である」が否定されることにはならないと思われる。それは、こちらの解釈こそが、最初の切り返しとして大きな意味をもっていると考えられるからである。

最初の部分では、二つの解釈のいずれの場合でも、朧月夜と光源氏の間には共有するものがないことになり、朧月夜は、光源氏の後れをとってしまって残念であると嘆くことそのものを、否定したことになる。それに対して、次の部分では、歌の上の句で、あなたはなぜ私の出家に後れをとったのでしょうかと問いかけている。ここでは、光源氏が自分の出家に後れをとったということが、認められている。同じ体験をし、同じように出家するはずだったのに、なぜあなただけでできなかつたのでしょうか、という問いは、光源氏の言葉をそのまま肯定した上で投げ返すものである。その点では、最初の言葉と矛盾している。この矛盾は、最初の部分と歌とを連携させて解釈することによって、弱まるように感じられる。しかし、最初の部分の切り返しがつまづきは、光源氏の後れをとったと嘆くことそのものを否定し、私一人が背負う苦しみを際立せることによって生み出されている。このような、共感を拒否しようとする姿勢にもとづいて考えれば、ここで朧月夜は、苦の経験として須磨以外のことも想定していると考えられるだろう。最初の部分と歌とは、連続すると同時に、それぞれが独自の意味を抱えているのである。「げに」という言葉

によって、いったんは否定された「後れぬ」という光源氏の言葉が、今度は肯定されることになり、さらにそれを歌によって切り返していく、という転換がここで行われている。

では、続いて、最後の部分に移ろう。最後の部分と歌との関係は、どのように解釈できるだろうか。最後の部分は、一切衆生の一人としてあなたのために回向しますという意味であった。一切衆生に回向するのは、彼らがひとしく苦を背負っているからである。ここでは朧月夜は、光源氏も、そして自分自身も苦を抱えて生きている存在として捉えている。この捉え方は、先にあげた歌の解釈によって導き出された光源氏像とは矛盾している。先の解釈にしたがえば、歌では、苦を経験し尼となった朧月夜と、栄華を実現した光源氏が対照的なかたちで描き出されている。光源氏は、「常なき世」という嘆きを抱えたことのない存在であり、救済を必要としない存在となっている。

しかし、この歌を「明石の浦であま船に乗って漁をしたあなたであれば、後れをとるはずがない」という意味に解釈すれば、異なった意味が浮かび上がる。「あま舟」の「あま」には、「尼」と「海人」が掛けられており、一首は、明石の浦で「あま」のような暮らしをしたあなたであれば後れをとるはずがないのに、という意味をもっている。この場合「明石の浦」は、栄華ではなく、出家へと結びつくような苦の経験を指している。ここで語られた苦の経験が、朧月夜と、さらには一切衆生と共有しうるものであれば、歌と最後の部分とはなめらかに結びつくことになる。つまり、歌によって「なぜ、あなたは明石の浦に流離するという、私と同じような、そして誰もが味わうような体験をしたのに、出家できなかったのでしょうか」と問いかけた上で、「苦を抱えつつ出家できなかったあなたを一切衆生の一人として回向します」と語りかけたと解釈できる。

朧月夜は、光源氏が抱える苦しみを思っていた。それは、光源氏が訴えかけた、二人が共有する苦しみとは異なるものであろう。朧月夜は、自分の苦しみ、光源氏の苦しみ、そして一切衆生の苦しみを、連続した形で捉える視点をもっていた。だからこそ、朧月夜の光源氏に対する思いは、仏の教えによってすくいとられることが可能であったと言えよう。なぜ朧月夜は、そうした視点をもつことができたのだろうか。

その背景には、朱雀院の存在があったと考えられる。光源氏からの手紙を読んだあと、朧月夜は次のように考えていた。

とく思し立ちにしことなれど、この御妨げにかかづらひて、人にはしかあらはしたまはぬことなれど、心の中あはれに、昔よりつらき御契りをさすかに浅くしも思し知られぬなど、方々に思し出でらる。御返り、今はかくしも通ふまじき御文のとぢめと思せば、あはれにて、心とどめて書きたまふ。(④262頁)

朧月夜は出家を早くに考えていたが、光源氏がひきとめたため、これまで実現することができなかった。この一文によって、朧月夜がかつて、出家した朱雀院のあとをおって尼になろうとしたという過去が呼び起こされる。光源氏は、朧月夜の出家に後れをとったと嘆いているが、その言葉によって朧月夜の内にもまた、朱雀院の出家に後れをとったという思いがわき上がることが暗示されていよう。後れをとった理由は、光源氏とかかわり、光源氏に心ひかれたからであった。そうだとすれば、今なお出家できない光源氏にもまた、数々の絆があると思ひ至ることになる。朱雀院との関係を思い起こすことによって、光源氏を、自分と向き合う存在としてだけではなく、様々な関係を背負い生きる存在として捉え返すことが可能になる。その延長線上に、光源氏の苦しみを思うことも、存在していよう。では、朧月夜が捉えた光源氏の苦しみとは、何だったのだろうか。

朧月夜は、朱雀院と過ごし、光源氏とかかわった半生を思い起こし、自らが経験した苦しみを捉え返した上で、最後の手紙を書いた。したがって、朧月夜が捉えた苦しみについて明らかにするためには、朧月夜の生涯を辿り直す必要があるだろう。朧月夜が経験した苦しみとは何か、朧月夜が捉えた光源氏の苦しみとは何か、そして、朧月夜だからこそ気づき得た、一切衆生の苦しみとは何だったのか。次に考えていくことにしたい。

## II

朧月夜は光源氏に対して「常なき世とは身ひとつにのみ知りはべりにしを」と述べていた。朧月夜は、どのような経験を通じて「常なき世」と実感することになったのだろうか。

朧月夜が初めて「世」を嘆いたのは、朱雀帝が譲位を考え始めたときであった。

おりみなむの御心づかひ近くなりぬるにも、尚侍心細げに世を思ひ嘆きたまへる、いとあはれに思されけり。「大臣亡せたまひ、大宮も頼もしげなくのみ篤いたまへるに、わが世残り少なき心地するになむ、いといとほしうなごりなきさまにてとまりたまはむと

すらむ。昔より人には思ひおとしたまへれど、みづからの心ざしのまたなきならひに、ただ御事のみなむあはれにおぼえける。たちまさる人また御本意ありて見たまふとも、おろかならぬ心ざしはしもなずらはざらむと思ふさへこそ心苦しけれ」とてうち泣きたまふ。(②280頁)

朧月夜が嘆いた「世」は、「わが人生」と訳されているが<sup>14)</sup>、より広い意味を含んでいると解釈した方がよいだろう。「世」という語は、自己の人生を指すと同時に、男女の関係、社会における人間関係など多様な事態を指している。このような用法を可能にしているのは、高木和子が指摘しているように「自己を取り巻く関係性こそがすなわち自己そのものだ」という発想、いいかえれば「他者との関係を抜きにした自己の生など所詮はあり得ない」という認識のありようだろう<sup>15)</sup>。朧月夜は、自己を取り巻く関係の変転を目の当たりにして、自己の身の上を嘆いているのである。

朱雀帝が語っていたように、朧月夜の父太政大臣はすでに亡く、姉弘徽殿大后も物の怪に苦しんでいた。朧月夜の生家の没落は、ここに始まる应该说よいだろう。そうした変化は、明石巻において、光源氏と明石の君との出会いと並行して語られている。光源氏が明石の浦に移り、栄華への一步を踏み出していた頃、朧月夜は、近親者の喪失を通じて「常なき世」を痛感していた。

同じ頃、朱雀帝もまた眼病を患っている。朱雀帝が亡くなることになれば、朧月夜を支えていた関係がすべて失われることになる。朱雀帝は、やがてきたる朧月夜の苦しい境涯を思い、心を動かされるが、そこで思い起こされるのが光源氏のことである。やがては、光源氏が朧月夜の世話をするかもしれない。それでも、自分の方が朧月夜を思う心はまさっているのだと朱雀帝は訴える。朧月夜は、朱雀帝の言葉聞き光源氏との関係について改めて思い出し、朱雀帝のありようと比較する。

御容貌などなまめかしうきよらにて、限りなき御心ざしの年月にそふやうにもてなさせたまふに、めでたき人なれど、さしも思ひたまへらざりし気色心ばへなど、もの思ひ知られたまふままに、などでわが心の若くいはけなきにまかせて、さる騒ぎをさへひき出でて、わが名をばさらにもいはず、人の御ためさへ、など思し出づるにいとうき御身なり。(②281頁)

朧月夜は、朱雀帝の情愛の深さと比べることによって、光源氏がそれほど自分を

思っていなかったことに気づく。たしかに物語は、光源氏にとって朧月夜が、真に恋う女君ではなかったことを、くり返し描き出している。

二人の出会いは、光源氏が藤壺のもとに忍び込むことを諦め弘徽殿に立ち寄った結果、もたらされたものであった。朧月夜との逢瀬ののち光源氏は、改めて、藤壺のあたりが固く閉ざされていたことを思い、藤壺をたぐいまれな女性であると賛嘆する。その後葵の上が亡くなり、右大臣は、朧月夜を光源氏と結婚させようとするが、紫の上と新枕を交わしたばかりの光源氏は、断る。それでもなお朧月夜が光源氏に思いをかけた結果、二人の関係が露見したのであった。しかし、この段階では、朧月夜は光源氏の思いに気づいていない。須磨巻でも、朱雀帝に深く思われながらも、光源氏を思い続ける朧月夜の姿が描き出されている。続く明石巻には朧月夜は登場せず、先ほど引用した濡標巻では、朱雀帝に心を寄せている。そのときに改めて、光源氏との関係を振り返り、自分のせいで大きな騒ぎを引き起こしてしまったことを思う。その姿は「いとうき御身なり」と総括されている。都に戻った光源氏は、朧月夜との関係を復活させようとするが、朧月夜は「うきに懲りたまひて」(②299頁)、昔のように応対しない。朧月夜は、何を「うき」と捉えていたのだろうか。

「いとうき御身なり」という叙述について武原弘は、二通りに解釈している。一つは、これを、朧月夜の「いとうき」という思いをあらわした文章とみた場合である。この場合、「いとうき」は「めでたき人なれど～など思し出づるに」を承けていると考えられるため、「うき」は、光源氏との過去をふまえて発せられている思いと解釈できる。もう一つは、「いとうき御身なり」を、朧月夜の身の上について語り手が評した文章とみた場合である。この場合、「いとうき御身なり」が承けるのは、この場面描写の冒頭にまでさかのぼる。先に引用した「おりみなむの御心づかひ近くなりぬるにも」以下の全部が含まれることになる。したがって、この叙述は「この場面において作者(語り手)が身代わってする、あるいは一体化してする朧月夜の現実認識のありようを指し示す叙述」であると言える<sup>16)</sup>。

武原の分析にしたがえば「いとうき御身なり」という表現においては、「うき」という語によって朧月夜の心情が表されていると同時に、「うき御身」という語によって朧月夜の現実認識が表されている。「うき身」としての私とは、親を失った私であり、深く思ってくれる人を悲しませる私であり、深く思ってくれない人と思う私であり、騒ぎを引き起こして相手と自分を苦境に追いやった私である。「うき身」という自己認識を支えている苦の経験とは、肉親を失い、自分の不実を恥じ、

男の不実に悩み、世間から嘲笑されているということである。そのなかで、「うし」という思いは、直接的には光源氏との過去からもたらされている。朧月夜は、薄情な人を思い続け、自分の思慮が足りなかったために騒ぎを引き起こしたことを悔んでいる。だからこそ「うきに懲り」た朧月夜は、光源氏の誘いを拒むのである。

再び朧月夜が物語の表舞台に登場するのは、若菜上巻である。朧月夜は、二条宮に移り住んだあと光源氏から対面を求められたとき、「昔よりつらき御心をこころ思ひつめつる年ごろのはてに、あはれに悲しき御事をさしおきて、いかなる昔語をか聞こえむ、げに人は漏り聞かぬやうありとも、心の問はむこそいと恥づかしかるべけれ」（④78頁）と考える。朧月夜は、光源氏の薄情さを明確に意識した上で、朱雀院の深情に応えることを自らに課している。しかし、光源氏が二条宮を訪れ逢瀬を求めると、いったんは拒んだものの最終的には受け入れる。その変心をもたらしたのが、昔の思い出であった。

二条宮を訪れた光源氏は、「しめじめと人目少なき宮の内のありさまも、さも移りゆく世かな」（④81頁）と思う。権勢を誇っていた頃、右大臣家には多くの人が集まっていたが、今はもうその賑わいは失われている。光源氏が抱いた感慨を描き出すことを通じて、一人残されて生きる朧月夜の孤独感が浮かび上がる。「移りゆく世」を思う光源氏は、二人を隔てているふすまを動かし「年月をなかにへだてて逢坂のさもせきがたく落つる涙か」とよみかける。朧月夜は、光源氏の訴えをいったんは退けるも、光源氏の言葉によって昔のことをまざまざと思い出す。自分のせいで、光源氏が須磨へと流離したことを思い起こすと、もう一度会ってもよいのではという気持ちが芽生える。共有する苦の経験が、光源氏に対する恋情を呼び覚ます。

逢瀬ののちに光源氏は、藤の花を一枝折り「沈みしも忘れぬものをこりずまに身もなげつべき宿のふち波」と歌をよみかける。それに対する朧月夜の様子は、次のように記されている。

女君も、今さらにいとつつましく、さまさまに思ひ乱れたまへるに、花の蔭はなほなつかしくて、

身をなげむふちもまことのふちならでかけじやさらにこりずまの波（④84頁）

朧月夜が思い乱れているのは、朱雀院の思いに応えようとして応えることができなかったからであろう。それでもなお「花の蔭」すなわち光源氏が慕わしく思われ

詠んだのが「あなたの愛は本当の愛ではないので、いまさら性懲りもなく、あなたのために涙を流すことはありません」という歌であった。

再会の場面において、右大臣家の没落と須磨流離の思い出は、二人の恋情を高める方向へ働いている。その一方で、朧月夜は、光源氏と再び契りを結ぶことによって、薄情な光源氏を思い、朱雀院の深情に應えられない自分と向き合うことになる。しかし、この場面において、朧月夜は自己を「うき身」と捉えることはない。

近親者を失い、男女関係における不如意を経験し、苦悩を深める。このようなありようは『源氏物語』第一部に登場する女君たちにも見られるものである。佐藤勢紀子は、女君たちは、そうした経験を通じて、自らの境涯のよりどころのない不安定さを痛感し、自らを「うき身」と自覚したのだと説いている<sup>17)</sup>。その背景にあったのが、宿世の思想であった。佐藤は、『源氏物語』が書かれた時代において、前世の業という意味での宿世は、「現在世における過去から現在、現在から未来への時の経過をまるごと支配しつつ、現世のもろもろの事象を全体的に規定するものと意識されつつあった」<sup>18)</sup>と指摘している。佐藤によれば、女君たちは、その宿世を他者から思われることが多いが、出離をとげる空蟬・藤壺・六条御息所は、自ら宿世を思う傾向が強いという<sup>19)</sup>。自らを「うき身」と思い「宿世」を自覚し、改めて自己を「うき宿世ある身」と捉え返し出家する。そうした女君たちに対して、朧月夜は一貫して自らの宿世を思うことがない。「うき身」という意識も、漣標巻には登場するが、若菜上下巻には登場しない。これは何を意味しているのだろうか。

「宿世」は、現在自分が陥っている苦境が、自らの意志や願望とは無関係に生じたものであるときに、意識される。空蟬は、父を失ったために老いた伊予介の後妻となり、さらに光源氏と契りを結ぶことになった後に、わが身を「心得ぬ宿世うち添へりける身」(①107頁)と捉えている。藤壺は、若紫巻において光源氏の子を妊った後、「あさましき御宿世のほど心憂し」(①233頁)と思い、賢木巻で、部屋に隠れていた光源氏に衣を引き寄せられ、逃げようとしたものの髪を掴まれていたことに気づいたとき、「いと心憂く、宿世のほど」(②110頁)を思い知る。六条御息所は、他の人の不幸を願う思いはないのに、夢の中では葵の上をいたぶっており、そうした自分について人々が噂をするのではないかと思ったときに、「宿世のうきこと」(②37頁)を思っている。

このような苦境は、自分が願い引き起こしたものではない。では、なぜ生じたのか。その根拠として想定されたのが、前世の行いである。前世の悪しき行いゆえに、現世の苦しみが生じた。そう捉えることによって、不如意な現実を自ら引き受ける

ことが可能になる<sup>20)</sup>。

朧月夜が宿世を思わないとは、以上のような観念を抱かない存在として造型されていることを意味している。朧月夜は、現在自分が陥っている苦境が、その理由も分からないまま、一方的にもたらされたとは考えない。なぜなら、朧月夜は、自ら不安定な境遇を選び取り、そこから逃れようとし、再びその境遇を意識的に選び取っているからである。

朧月夜は、父の意向に背き光源氏との関係を選ぶ。その後、父が亡くなり心細さを味わう。しかしそのとき、もし父がいればと夢想することはできない。すでに彼女は、父が与えてくれる安定よりも、光源氏との恋を選び取っているからである。朧月夜は、濡標巻で、自分の心が若く幼かったせいで、自分だけではなく光源氏をも窮地に陥れたと意識していた。それゆえ、都に戻った光源氏に関係の復活を求められても、「うきに懲りたまひて」応えなかった。自らの経験を憂きものと捉え返した朧月夜は、その過ちを繰り返さないよう自らを律する。憂きことから逃れる努力を朧月夜はし続けている。

朧月夜は、若菜上巻で再び光源氏に関係を求められ逢瀬をもつが、この逢瀬も、朧月夜の決断が招いたものである。光源氏との間にあったふすまには、掛け金をしてあったが、それを外したのは、朧月夜であった。朧月夜は、光源氏との関係を、苦をもたらすものと捉えた上で、自ら選び取っている。かつて光源氏を追い求めたときは、それが「うきこと」をもたらすとは気付いていなかった。だからこそ「うき」結果を目の当たりにし、自らを「うき身」と嘆くことができた。しかし、今回は「うきこと」がもたらされると知りつつ、その関係を選び取った。そのとき、自らを「うき身」と嘆くことがないのは、もっともなことであろう。朧月夜は、「宿世」という観念を呼び起こさずに、自己を取り巻く現実を自ら引き受けていく女君として造型されている。

その結果、何が可能になったのだろうか。結論を先取りすれば、朧月夜を通じて、自己の苦と他者の苦を同じ地平で捉える視点を描き出すことが可能になったと思われる。いいかえれば、宿世を思わない朧月夜だからこそ、光源氏の苦しみを、一切衆生の苦しみを思うことができたということである。

自己を「うき身」と捉え、宿世を思い、現実を引き受けるときには、自己という存在が強く意識されている。そのとき意識されているのは「身」である。すでに述べたように、「世」もまた自己を指す語であった。「世」を用いるときには、自己を取り巻く関係性が自己であると捉えていたとすると、「身」を用いるときには、

そうした関係性をいったん捨象し、自己を捉え返すことが行われている<sup>21)</sup>。その後、意識が向かう方向として、二つのありようが考えられる。一つは、そうした「身」を改めて、この「世」の中で生きる存在として捉え返すという方向である。関係の中で生きる存在として、再び自己を位置づけることになる。もう一つは、そうした「身」を宿世との関わりにおいて捉え返すという方向である。宿世を思い、改めて自己を「うき宿世ある身」と自覚するとは、現在の関係をいったん捨象し、前世から来世までにいたる長い時間の流れの中に自己を位置づけることである。そこでは、自業自得という理にもとづいて、自己という存在が捉え返されている。宿世の思想は、自己を他者から切り離すという効果をもっているのである<sup>22)</sup>。

因果応報の思想は、他者と切り離された存在としての個を析出する。今ここで抱えている苦しみを、はかりがたい前世の行いの結果として受けとめたとき、それは、他者と共有不可能なものとして意識される。また、前世の自己は苦を与える存在として、現在の自己は苦を与えられる存在として規定され、両者の関係が固定されることになる。だからこそ、来世の自己に楽を与えるべく、現在の自己を変えることが目指される。

朧月夜は、眼前の苦境の原因を、現世の自己の行いに見いだしたため、この発想の中に入らなかった。その結果、現在の自己を、苦を与えられる存在とは規定しなかった。むしろ逆に、朧月夜の生は、自己を、苦を与える側の存在として認定するのにふさわしいものであった。なぜなら、朧月夜は、光源氏に須磨流離という苦難を負わせ、かつ、光源氏と同じように、心変わりをするという経験をしているからである。

光源氏が明石の君に思いをかけていた頃、朧月夜は朱雀帝を深く思うようになっていた。このとき、光源氏と朧月夜が思うようになったのは、家の繁栄と深く関わる存在である。明石の君との結婚は、彼女の父明石の入道が望んだものであり、朱雀帝への入内は、朧月夜の父右大臣が望んだものであった。親たちがその結婚を望んだのは、両者の間に子が生まれることによって、家の繁栄が実現されるからである。光源氏と朧月夜が、それぞれ心を動かした相手は、自分に安定をもたらしてくれる存在であった。朧月夜にとって心変わりは、自分だけが一方的にされたものではなかった。そこでは、自分に一方的に苦が与えられているという意識は生まれない。むしろ朧月夜からすれば、光源氏と自分は、同じように心変わりをした人間となる。朧月夜は、光源氏に贈った最後の歌で、光源氏が明石の君へと心移したことを詠み込んでいたが、そこには、同じ時期に自分もまた朱雀帝へと心移したこ

とが、詠み込まれていたのではないだろうか。そうだとすれば、この歌は、あなたと私は、同じように心変わりをするという経験をしたのに、なぜあなたは、私の出家に後れをとったのでしょうか、という問いかけとなる。

自分が心変わりをしたから出家するというのは、一見あり得ないことのように思われる。自分の恋する相手が他の女君に心移し、世のはかなさを思い出家するという道のりと比べてみれば、たしかに突飛なありようである。しかし、朧月夜の場合は、出家の直前に経験していたのが、朱雀院から光源氏へと心移すということであり、本人もそのことを強く意識していた。朧月夜は、二条宮に戻り、光源氏から対面を求められたとき、「げに人は漏り聞かぬやうありとも、心の問はむこそいと恥づかしかるべけれ」（④78頁）と思い、光源氏の申し出を拒んでいる。自らの心に問い、朱雀院の深情に応えようとした朧月夜は、最終的には自ら決断し、光源氏と契りを結ぶ。そうした自らのありようをすべて見つめた上で、朧月夜は、光源氏の心が離れたときに出家するということを決めているのである。

物語は、朧月夜の決断を暗示したうえで、光源氏と朧月夜が最後の手紙を交わす様子を描き出した。光源氏に対する返事の背景には、光源氏との再会と隔てという問題が潜んでいる。では、朧月夜は、再び光源氏と逢瀬を持つことによって何に気づいたのだろうか。

先に述べたように、光源氏との逢瀬は、朧月夜が自ら選び取ったものであった。逢瀬ののちに朧月夜は、光源氏から歌をよみかけられ、様々に思い乱れつつも、やはり光源氏を慕わしく思い「身をなげむふちもまことのふちならでかけじやさらにこりずまの波」という歌をよんでいる。朧月夜は、光源氏の恋情がまことではないことを認識している。しかし、それでもなお光源氏に惹かれてしまう。そうしたありようが、この場面からは浮かび上がる。

光源氏の思いがまことか偽りかを問うとき、自らの思いもまた問い返される。朧月夜はこれまで、朱雀院を真に思っていると考えてきたが、それは偽りであった。朧月夜は、自分では気づかないうちに、朱雀院と偽りの関係を結んでいたことになる。光源氏が、朧月夜の思いに応えなかったように、朧月夜は、朱雀院の思いに応えられなかった。そうだとすれば、光源氏もまた、自分の思いに応えてくれない相手に恋をし、朱雀院もまた、誰かの思いに応えられなかったということが想定されよう。朧月夜が見いだしたのは、この世において二人関係の成就是不可能であり、人は必ず思い思われるという関係の中で、他者に苦を与え、また与えられるということなのではないだろうか。

ここで『源氏物語』が語る男女関係に目を向ければ、物語は、光源氏の苦しい恋の相手として藤壺を登場させ、朱雀院への思いに苦しんだ女君として、承香殿女御と藤壺女御を配している。男女の関係は、二人で完結するものではない。思い思われるということは、向かい合う幸福な二者をつくり出すのではなく、一方的に思う側を累々と生み出していく。時に報われない思いに悩むゆえに、他の人の心に移すこともあるだろう。心変わりは、自分を守るために必要である。しかし、新しい相手へと心を動かすことは、他の誰かを苦しめることにもなる。『源氏物語』第二部が描き出すのは、そうした、思い思われることが如何ともしがたく齟齬をきたすありようである。雲居雁は夕霧を思い、夕霧は落葉の宮を思い、落葉の宮は柏木を思い、柏木は女三の宮を思う。第一部においては、深く思う人として、そして同時に深く思われる人として、光源氏が大きな位置を占めていたため、恋を描く場合には、男女の二者関係、または女一人に男二人、男一人に女二人という三者関係が中心となっていた。それに対して第二部では、関係は二者または三者に閉ざされることはない。そこでは、連鎖的に報われない思いが増殖していく様子が描き出されている。

しかし、恋の当事者にとっては、そうした連鎖は見えがたい。思うことの苦しみ、あるいは思われることの苦しみを、自分一人が背負っているように感じられる。落葉の宮と女三の宮は、一方的に思われることの苦しみを、夕霧と柏木は一方的に思う苦しみを背負っていると考える。それに対して、朧月夜は、思うことの苦しみと思われることの重さを、ひとしく実感できる位置にあった。それは、朧月夜が光源氏を深く思ったのと同じように、朱雀院が朧月夜を深く思ったからである。報われない思いを抱いているのは自分だけではない。むしろ、自分のせいで報われない思いを抱く人がいる。

朱雀院に一度向き合ったからこそ、朧月夜は朱雀院の心ざしの深さを知る。そして、心ざしの深さがもたらす安定した関係が、自分のよりどころであると思う。しかし、再び光源氏と会ったときに、自らの思いが別の所にあったことに気づく。光源氏と最初に出会ったときには、光源氏の心の浅さには気づかず、ひたすら自分の思いにもとづいて行動していた。それに対して、光源氏と再会した後は、光源氏が心変わりをすることを意識した上で、かかわりをもっている。そこではすでに、安定した関係を築くことは断念されている。朧月夜にとって、光源氏の心が自分から離れる日が来るのは、想像していたことであつた。光源氏との隔てを、朧月夜が引き受けることができた背景には、朱雀院との関係があつたと言えるだろう。自分の心変わりを自覚していたからこそ、光源氏の心変わりを避けがたいものとして受け

とめることができたのである。朧月夜が見つめていた苦は、自分一人が背負うものではなく、思い思われながら生きる人間が不可避免的に抱え込む苦しみであった。

そうした半生を背負う朧月夜を、物語は、第二部冒頭の若菜上巻に続く若菜下巻で出家させた。朧月夜の出家は、後に続く人々の苦悩を予言するような位置に置かれている。朧月夜は、思い思われながら生きる人間が抱え込む苦しみ の存在を暗示し、舞台から去って行く。その去り際に残したのが、光源氏への最後の手紙であった。朧月夜の心情は、その手紙を通じて明かされる。では、朧月夜が最後に辿り着いたのは、どのような地点だったのだろうか。改めて考えることにしたい。

### III

光源氏は、須磨流離という苦の経験の共有を根拠として、無常を自覚し出家し修行を重ねるといふすべての営みが、二人の特別な関係から生み出されたものであり、さらにその関係を強化するものであると訴えた。かつ「回向」というときに、極楽往生を目的とした回向を想定していたのであれば、光源氏は、朧月夜は第一に自分とともに極楽往生することを願っていると期待したことになる。

それに対して朧月夜は、最初に、無常の思いを共有していないと告げた。これは、光源氏が描き出した二人の関係の出発点を否定したことを意味している。そして最後の部分では、光源氏を第一に回向することを拒絶した。これは、自分が願うのは、光源氏との二人関係を来世において成就させることではない、ということである。

朧月夜は、朱雀院が出家したあとに光源氏と契りを結んだ。光源氏に対する恋情があるならば、この世における二人関係の成就を断念したとしても、いや、むしろだからこそ、来世での成就を願うということは、十分考えられることである。しかし朧月夜は、そうした願いをもっていないと光源氏に告げている。なぜ朧月夜は、来世における二人関係の成就を願わなかったのだろうか。

その理由は、前の章で行った分析を思い起こせば、納得のゆくものであろう。朧月夜は、光源氏を恋うが報われず、一方朱雀院に恋われたが、応えることができなかった。このような関係がつながりゆくことによって人間世界が成立しているとするれば、ある一組の男女が極楽浄土に往生し一つ蓮の上に生まれることによって、その男女の周囲には、報われない思いを抱いた多くの男女が誕生することになる。

あるいは、そもそも人は、一つ蓮の上に一緒に生まれたい相手が誰か、はっきりと分かるのだろうか。朧月夜は、朱雀院のあとをおって尼になろうとしたときは、朱雀院こそが自分の対となるべき相手であると考えていた。しかし、その思いが偽

りであることを後に知ってしまった。仮に、今現にともに極楽浄土に往生することを願っている男女がいたとしても、双方で真にそう思っているのかは分からない。

人は、真に対となることを願う相手が誰か分からない。もし分かったとしても、その思いが報われるとは限らない。朧月夜に即していえば、真に恋う相手が分かるのは、絶対に報われないと認識した上で、しかしこの相手なのだ気づく瞬間であると言えよう。報われているように思うときは、朧月夜が朱雀院を選んだときのよ  
うに、実は相手ではなく、相手が与えてくれる安定を見ているのかもしれない。

しかし、このような真の恋に気づく瞬間の規定も、光源氏の言動を思えば否定される。光源氏には、難しい恋ほど執着するという癖があった<sup>23)</sup>。困難があることが、逆にその思いを真の恋と錯覚させることもあるだろう。

一方、朱雀院のありようは、報われないことを自覚した上で、なお恋い続けるということであった。朱雀院は、朧月夜の心が光源氏に向かっていることを知りながらも、朧月夜を思い続けたのである<sup>24)</sup>。一人になり光源氏と再会した朧月夜は、そうした朱雀院の思いにも気づくことになっただろう。

では、朧月夜にとって、朱雀院にとって、光源氏にとって、何が救済となるのだろうか。その姿は見えがたい。しかし、それが二人関係の成就でないことは確かである。思い思われる関係が絡まり合い切れ目なく続いていく、そうした関係の全体に、何らかの成就がもたらされる必要がある。

朧月夜が最終的に目指したのは、仏の教えによって、すべての存在を救済することであった。仏道修行において一切衆生の救済が願われるのは、すべての存在が関わり合いながら生きている以上、誰か一人だけが救われることは、論理的に不可能だからである。善行をなし功徳を積み重ねるとともに、その功徳を他者にめぐらし、ともに仏となることを目指す。それが、大乘仏教が見いだした成仏への道のりであった。朧月夜は尼となり、自らが功徳を与えることのできる存在となることを決意した。その地点においては、一切衆生の一人として光源氏と朱雀院を思うことができ、同時に、光源氏と朱雀院に対して、勤行をなすという形で具体的に働きかけ続けることができる。仏教は朧月夜に、観念と儀礼において光源氏と朱雀院を思う方法を与えてくれたのである。朧月夜は、仏の教えを通じて、自らの思いをすくいつけてもらったと言えよう。

では、朧月夜と仏教との出会いには、どのような特徴があるのだろうか。

人が仏道修行に入るときには、冷徹な現実認識と、未来に対する過剰な願望が存在している。この世において自らの願いは成就しないと見極め断念することが、こ

の世を捨てるという行いを生み、修行の果てに自分を含めたすべての存在が救済されることを願う思いが、日々の勤行を支えることになる。このような現実認識と願望は、仏の教えを学ぶことを通じて育まれていく。しかし、仏の教えを学ぶことは、一方で光源氏のように、自らの愛執の断ちがたさを痛感させることにもなる。

それに対して、朧月夜は、朱雀院と関わり光源氏と関わることを通じて、以上のような現実認識と願望を育てていった。朱雀院に対して自分がつくり出した隔てを思うことによって、光源氏が自分に対しておいた隔てを受け入れることが可能になり、この世における願望の成就を断念することができた。そして、光源氏の苦しみと朱雀院の苦しみを思うことが、一切衆生の救済を願うことの端緒となった。朧月夜の生の軌跡を通して描き出されたのは、人は、他者と関わり合う中で、本人も気付かないうちに、仏の教えの近くまで来ることがある、ということである。

朧月夜が、自らの経験を通じて仏の教えを捉え返し、自らが目指す生き方を言葉の形で表現する。そうした姿は、出家後になされた、光源氏との手紙のやりとりを通して描き出された。他者との関わりは、朧月夜が、仏の教えに近づくとときだけではなく、仏の教えを語るときにも不可欠なものとなっている。ことに最後のやりとりにおいては、贈答歌のもつ形式が、重要な役割を果たしている。

手紙の中で朧月夜は、まず、光源氏が提示した共感の関係を拒絶した。それは、仏教の文脈でいえば、共感を求めて他者に働きかけ続ける、自分の恋情も相手の恋情も否定したことを意味している。手紙を書く前に朧月夜は、光源氏の言葉に心を動かされていたが、「身ひとつにのみ」と言い切ることによって、自分が味わっていた共感の関係を、自ら拒絶している。そうした否定は、光源氏の立場からすれば、他者に対する思いを執着と捉える知のはたらきによってなされるべきである。その結果として、特定の個人ではなく、すべての存在を思うという慈悲が生まれてくることになるだろう。しかし、朧月夜の手紙では、相手の言い分を切り返すという女歌のはたらきによって、二人関係の成就を目指す情念の否定が実現されている。同時に、贈答歌が、反発を示すことによって新たな共感を形づくるという力をもっているからこそ、二人関係の否定が、単なる否定とならず、共感の地平をつくり出す原動力となっている。

その機微を具体的にあらわしているのが、最後の文である。「回向には、あまねきかどにても、いかがは」は、光源氏が願った二人関係の継続を拒絶するものである。回向に託して自らの恋情を訴えた光源氏に対して、朧月夜は、回向の本来の意味を持ちだすことによって切り返した。一切衆生は、光源氏の願望を拒絶するため

に利用されている。仏の教えを利用することによって朧月夜は、光源氏の薄情さに対する恨みを、反発の形で表現できたのである。

同時に、回向という教えがあるからこそ、朧月夜は、光源氏を思い続けることが可能になった。それは、反発を通して明確に意識化されることとなった、新たな希望と言えよう。最後の手紙を書くことによって、朧月夜は、自分が抱く恋情と恨みを、否定するのではなく、転換させる方法を見いだしたのである。それはまた、一切衆生に対する慈悲の思いが生み出された瞬間でもあった。このような、慈悲の生まれる道のりは、物語だからこそ描き得たものであろう。

もっとも『源氏物語』が慈悲を語るのは、それが、来世における何らかの救済をもたらすからではないと思われる。物語は、慈悲の心を抱いた朧月夜が、往生したというような後日談を語ることはない。朧月夜の出家において描き出されているのは、来世の救済をもたらすものとしての出家ではなく、現世の苦を引き受ける方法としての出家なのではないだろうか。

『源氏物語』に登場する女君たちの多くは、光源氏に隔てをおかれることによって苦悩を深めていく。ことに第二部では、朧月夜以外にも女三の宮と紫の上が、それぞれに光源氏との関係に悩み苦しむ。そうした苦悩を背負っていた朧月夜は、最後の手紙において、一切衆生の一人として光源氏を思うと伝えることができた。朧月夜は、二人関係に閉ざされない形で光源氏を思う道を見つけることによって、光源氏との隔てを引き受けた上で、光源氏を思い続けることが可能になったのである。慈悲の思いをもつことは、実はまず何よりも、現在の自分を救うことに結びつく。

仏教は、現世における他者との関係を引き受け、自らが生きていくために、必要とされている。女君たちが、来世の救済の困難さを指摘されながらも道心を固めていく理由の一端が、ここにあると言えるだろう。

## 注

- 1) 『源氏物語』と仏教の関係について藤原克己は、仏教は物語の中に素材として取り込まれており「浄土教によって人間の愛執が逆に深く浮き彫りにされてくる」と述べている（「『座談会』源氏物語のことばへ 藤原克己・高橋亨・高田祐彦 『文学』岩波書店、2006年9,10月号、11頁）。
- 2) ここで重要なのは、『源氏物語』に登場する人々にとって仏教思想は、自らの外部に単なる教説として存在するのではないということである。『源氏物語』における「あはれ」の問題について論じた高田祐彦は「『源氏物語』では、仏教思想は人間世界の外側にある

のではない。作中人物が生きる軌跡の中に必然的に胚胎する形で、仏教の問題が招き寄せられるのである」と指摘している。たとえば、光源氏は紫の上の死後、「あはれ」を「執」だとする考えを明石の君に対して表明しているが、その発言の背景には、六条御息所の死霊の出現、夕霧と落葉の宮の騒動、紫の上の死が存在している。仏の教えは、自らの体験を通じて、改めて真実として受けとめられているのである。しかし、それでもなお「あはれ」を「執」として割り切ることはできない。それが「作中人物の生を通して物語が至りついた地平」であると高田は論じている（「「あはれ」の相関関係をめぐって—『古今』『竹取』から『源氏』へ—」『国語と国文学』1996年11月）。本稿が問おうとするのは、光源氏の生においてと同じように、朧月夜の生においても、仏の教えが登場人物の内部から捉え返されているのではないかということである。朧月夜の捉え方は、光源氏の捉え方とは異なっている。朧月夜の出家について明らかにすることは、今後、光源氏の非出家について論じる際に、新たな視点を提示してくれると予想されよう。

- 3) 以下『源氏物語』の引用は、新編日本古典文学全集（阿部秋生他校注訳，小学館，1994年～98年）に拠る。引用末尾の括弧内に巻数・頁数を記す。
- 4) 『内閣文庫本 細流抄』桜楓社，1980年，295頁。
- 5) 『孟津抄 中巻』桜楓社，1981年，396頁。
- 6) 『源氏物語 湖月抄2』日本図書センター，1978年，923頁。
- 7) 回向の目的は、行われる法儀によって異なっている。天台宗の場合、代表的な法儀として「法華懺法」と「例時作法」がある。「法華懺法」では、最後に「願以此功德 普及於一切 我等與衆生 皆共成佛道」という回向文が唱えられ、一切衆生とともに成仏することが願われる。「例時作法」では「五念門」の最後に「以此禮讚佛功德 莊嚴法界諸有情 臨終悉願往西方 共觀彌陀成佛道」と唱えられ、さらに「願共諸衆生 往生安樂國 願共諸衆生 值遇彌陀尊」という四句が続き、作法が終わる。この場合、先の句では、一切衆生が極楽に往生し、阿弥陀仏に会い成仏することが願われており、最後の句では、衆生とともに安樂國に往生し、阿弥陀仏に会うことが願われている。『源氏物語』では若紫巻において、光源氏がこもった山寺で、夕に「例時作法」が、暁に「法華懺法」が行われている様子が描き出されている。『源氏物語』に描かれている仏教は、天台浄土教を主としており、朧月夜の日常の勤行も、法華經と阿弥陀經中心としたものと想定されよう。『大正新修大蔵經 第七十七巻』，三角洋一『源氏物語と天台浄土教』（若草書房，1996年），吉田実盛「天台宗の回向について」（『天台学報』31，1988年）参照。
- 8) 子安紀子「朧月夜の再登場が意味するもの」『王朝文学史稿』20，1995年2月，24-25頁。

- 9) 秋賢淑「朧月夜の君の再登場をめぐって」『駒澤大学大学院国文学会論輯』28, 2000年5月, 29頁。
- 10) 姥澤隆司「光源氏の寂寥—周辺女性達との出家をめぐる対話の意味するもの—」『北海道文教大学論集』11, 2010年3月, 160—161頁。
- 11) 鈴木日出男「<いろいろのみ>の歌—光源氏と朧月夜—」(紫式部学会編『源氏物語の環境 研究と資料—古代文学論叢第十九輯—』武蔵野書院, 2011年) 205頁。
- 12) 『賀茂真淵全集 第十四巻』続群書類従完成会, 1982年, 443頁。
- 13) 「明石の浦」については、古注以来、様々な説が提示されている。『細流抄』は「明石上ゆへにあかしまてはくたり給へる也我身ゆへにてはなかりしと也」と注釈している(前掲書, 295頁)。『湖月抄』は「明石の上などにかかづらひて、我に道心おくれ給ひしにこそと心をこめたるべし」と注釈している(前掲書, 924頁)。真淵の解釈は、両者を合わせ、さらに独自の解釈を付け加えたものとなっている。なお、本居宣長は「明石の浦といふに、明石上の意は、さらになし、たゞ須磨の浦にといはむも、同じこと也」と述べている(『本居宣長全集 第四巻』筑摩書房, 1969年, 458頁)。しかし、「明石の浦」を「須磨の浦」と同じであると考え、朧月夜の歌は、光源氏の歌をなぞり返したものに過ぎなくなる。朧月夜は「須磨の浦」を「明石の浦」に変えることによって、光源氏の言い分をどのように切り返そうとしたのかが問われるべきであろう。現代の注釈では、新編日本古典文学全集が「源氏のいう「須磨」を「明石」に変えて、流離の真意は明石の君との邂逅にあったと切り返す」と頭注に記しており、『細流抄』の解釈を採用している。これらの中で本稿が目にしたのは、真淵の注釈である。真淵は、「明石の浦」は明石の上を指すと考え、一首の意味を、手紙の最初の部分と結びつけて解釈するとともに、一首が単独でもつ意味をも明らかにしている。この分析は、三つの部分の独立性と連続性を問うとする本稿にとって、極めて示唆的であった。真淵の解釈をふまえ、さらに本稿では、朧月夜の歌は、最後の部分とも結びつくことによって、もう一つの意味を生み出しているという解釈を、提示したいと思う。
- 14) 新編日本古典文学全集の頭注。
- 15) 高木和子『源氏物語の思考』風間書房, 2002年, 12頁。
- 16) 武原弘『源氏物語の認識と求道』おうふう, 1999年, 78頁。
- 17) 佐藤勢紀子『宿世の思想』ペリかん社, 1995年, 144—145頁。
- 18) 同上書, 146頁。
- 19) 同上書, 124—125頁。
- 20) 空蟬が抱いた「宿世」の観念について分析した木村純二は、「己れの現実を「宿世」と

して捉え返すことは、しばしば誤解されるように現実からの逃避なのではなく、己れの願いと異なる現実をそれとして引き受けようとする自覚的な営みであるといえよう」と述べている（木村純二「『宿世』の思想」『哲学会誌』39, 2005年3月, 16頁）。

- 21) 藤田加代は、「世」が「場、空間、世界といったものの中で関係を把える概念」であるのに対して、「身」は「場を捨象した一点の存在としての自己を把える概念」であると指摘している（藤田加代『「にほふ」と「かをる」』風間書房, 1980年, 246頁）。
- 22) 第一部に登場する女君がもつ「うき身」の意識と比べたとき、朧月夜が光源氏に対して最初に詠んだ歌の特異性が、改めて浮かび上がる。朧月夜が詠んだ歌は「うき身世にやがて消えなば尋ねても草の原をば問はじと思ふ」（①357頁）であった。この歌には、「うき身」である自己が消滅し、そのあとを探し求めて光源氏がさまよう姿が詠み込まれている。朧月夜が入内を控えた身で光源氏と契りを結んだことは、自己を「うき身」と捉える理由として説得力のあるものである。しかし朧月夜は、「うき身」という意識から、自己の宿世に思いをはせるのではなく、「うき身」を用いて、光源氏を死へと誘い込むような歌をよみかける。朧月夜のもつ、他者へと開かれたありようが、第二部に至り、独自の出家へと結実したと考えられよう。
- 23) 賢木巻では、光源氏が、齋宮となる六条御息所の娘に対して心を動かされる様子が「かうやうに、例に違へるわづらはしさに、かならず心かかる御癖にて」（②92頁）と評されている。
- 24) 若菜上巻において、朱雀院が、女三の宮の乳母に対して光源氏のすばらしさを「まして女のあざむかれむはいとことわりぞや」と語ったときに、語り手の言葉として「御心の中に、尚侍の君の御事も思し出でらるべし」（④28-29頁）と記されている。ここでは、朱雀院が朧月夜の思い人として、最後まで光源氏を意識し続けたことが示されよう。